

# 信から猛五十造り国

神話再発見

古事記1300年を前に

4

之男命が、息子の五十猛神と新羅國からもつてきて、最初に上陸した場所。大田市五十猛町にはそんな神話が伝わっている。この神

八俣の大蛇退治で知られる須佐之男命が、息子の五十猛神と新羅國からもつてきて、最初に上陸した場所。大田市五十猛町にはそんな神話が伝わっている。この神

原を追われた須佐之男命は、五十猛神を連れて新羅國へ。しかし、須佐之男命は「この地にはいたくない」と言って舟を造り、日本に

話を見つけ直し、全国へ発信していこうと、地元の人たちが一体となって学習講座を開いている。「先祖伝来の神話で地域の活性化を」を合言葉に、大きな未来像を描いている。



五十猛町周辺の神話ゆかりの地(静之室)を訪ねる受講生たち(大田市)

五十猛神、「五十猛神が天降られるとき」、たくさんの樹の種をもつて下られた。けれども龍地に植えなしで、すべて持ち帰って、苗繁からはじめて、大八洲の国の中に播き増やして、全部青山にしてしまわれた。日本書紀で樹木の神として描かれている。家屋をつかさどる神として古事記に登場する「大屋根古神」の同一神と考えられている。

到着したという。

五十猛町の言い伝えでは、その須佐之男命と五十猛神は最初、五十猛神が兄妹の神たちと別れた場所に着き、そこに舟をつないで神上の浜から本土に上陸した、とある。

講座を発案したのは、五十猛町で水産加工品製造・販売会社「和田珍味」を経営する和田信三さん(51)。「日本の国造りが、五十猛から始まつたと言つても過言ではない。この上陸伝説を多くの人に伝えるには、地元から動かなければ」と考え、まず神話を学ぶことから始めた。

和田さんは「五十猛を起念に観光ルートを確立し、ゆくゆくは出雲地方の神話と結ぶことができる」。石見銀山遺跡や三瓶山と続く大田発の新たな観光資源として期待する。

きつかけは11年前、店に訪れた初老の男性観光客からこの神話について尋ねられたことだった。和田さんが戸惑っていると「地元の人間が知らないのか」とあきれられ、自分の無知が恥ずかしくなった。それ以来、神話の情報を集め、地元の活性化策につなげる構想を膨らませてきた。

講座は昨年10月に開始。神話にまつわる史跡を散策するなど2月までの計7回。市内外から約120人が受講し、遠くは神奈川県からも参加もある。「20人ぐらい来る」が修了した後、企画・立案していくたいとい、「五十猛神を通じて全国的なつながりが構築できればと思う。そのためにも五十猛の神話を発信していきたい」と夢を広げる。

地域の神話に対する思いは大きい。その情熱が実を結べば、神話の地・五十猛の名はより一層高まるはずだ。

(陶山格)